森の製材リソラ　磯矢亮介

1.F.L.ライトのブロードエーカーシティー
自給自足の社会と与えあいの循環経済
AIが社会を管理する？人が望む社会とは
2.日本人の歴史と性質
3.製材機と簡易架線集材による林業
4.ロープと滑車で遊ぼう　子供のイベント

近年、効率を重視する資本主義のままに、社会が人々が望んでいない方向に進んでいると感じます。圧倒的な能力を持つAIの出現は人類の未来を脅かしています。

一方で人の未来を縄文時代や日本人の在り方（利他）に期待するような意見を見ますが、資本主義の次に来る「人が望む社会にどのようなものがありうるのか」、そのビジョンが具体的に提案されたものをほとんど見たことがありません。

私には荷が重いですがここにその誰も言っていない「人が望む社会」のビジョンを提示してみます。

資本主義（お金が価値、奪い合いの循環）が終わることと、ＡＩはなくてもいい、使っても任せず依存しないことが大事です。

このビジョンは次の3つがもとになっています。

・E.フロムの著作「愛するということ」。人のもっとも強い要求で共通の問題はいかに孤立を克服し他者と一体化するかということで、いかに生きるかという問いかけに対し愛こそが唯一の健全で満足のいく答えである。
・F.L.ライトが1932年大恐慌の時に作った社会の模型ブロードエーカーシティーが示す銀行の資本主義に対抗する自給自足の社会
・佐藤洋行の「奪い合いの循環から与えあいの循環に変換する」という言葉

　与えあいの循環とは？　物々交換ではない。与える人と貰う人は同じ人でなくてよく、ただ循環して全体が成り立つ。等価で交換する必要がなく損得勘定が無くなっている。貰ってもらえないことが哀しい。与えるものがない人ももちろん貰える。誰もにいることの意味がある。

与えあいの循環社会があったのは米作りが始まり支配階級が生まれる以前の縄文時代にさかのぼります。「与えあいの循環」は、縄文と現代技術を直結する新しいビジョンです。

与え合いの循環、美と愛、人誰もが主役、能力を最大限に発揮、自己実現、承認、人が望む社会

資本主義、効率重視、競争と争い、ＡＩが主役になり社会を管理、人が無力化、疎外、人が望んでいない社会

社会は２つに分岐するかもしれません。資本主義が残ってＡＩが管理し人が無力になる都市と、与えあいの循環社会で人が自らの頭と手で生産する力を手放さず発達し続けた都市外の社会では、２つの社会の間で人の能力に大きな差ができるでしょう。

ＡＩが社会を管理する？　人が望む社会とは

有機的建築アーカイブ　　磯矢 亮介

上のＱＲコードで、スマホやＰＣでこの文書を開き、青い傍線のところをクリックすると、補足する資料や chatGPT が作った分析が開きます。

今の世界は複雑になりすぎて人には解決できない。社会はＡＩが管理する。生産と管理、面倒なことは効率が人より良いＡＩがしてくれ、人はベーシックインカムを与えられ、楽して好きなこと、趣味、仮想現実（ゲームのこと）、ボランティアをしていればいいという未来の予測を見ます。

内閣府のＳｏｃｉｅｔｙ５．０や近年の今まで国民の生活と社会を保護してきた法律や制度の改変を見ていると効率を重視する資本主義のままに、社会が人々が望まない方向に進んでいると思います。

一方で人類の未来を縄文時代や日本人の在り方（利他）に期待するような意見を見ますが、資本主義の次に来る「人が望む社会にどのようなものがありうるのか」、そのビジョンが現実的に提案されたものを私は今までほとんど見たことがありません。

ＡＩの圧倒的な能力に人の未来に諦めを感じました。（２０２３秋号）。その後日本や縄文の歴史を調べました。先月 ChatGPT と寒冷化のほうが温暖化より影響が大きいのではないか、に始まる議論をする中で、気候を制御できると考えるのは思い上がりで、「自然に個々が合わせるのがいい生き方」ということが出て、人が主役に残るビジョンの光明が見えるように思いました。私には荷が重いですが ChatGPT の助けも借りて、ここにその誰も言っていない「人が望む社会」のビジョンを提示してみます。

資本主義（お金が価値）が終わることと、ＡＩはなくてもいい。使っても任せず依存しないことが大事です。

ここ数年、雑木林への投稿や展示で取り上げてきた次の1~3がカギとなっています。

1．E.フロムによる「愛するということ」１９５６。

フロムは**人が望む社会の原理が愛である**ことを示しました。フロムは「人のもっとも強い要求で共通の問題はいかに孤立を克服し他者と一体化するかということで、いかに生きるかという問いかけに対し愛こそが唯一の健全で満足のいく答えである。愛は与えるものであり貰うものではない。愛には**配慮**、**責任**、**尊重**、**知**の基本的な要素があるが愛するためには自分が生産的な段階に達していないといけない。」と述べました。

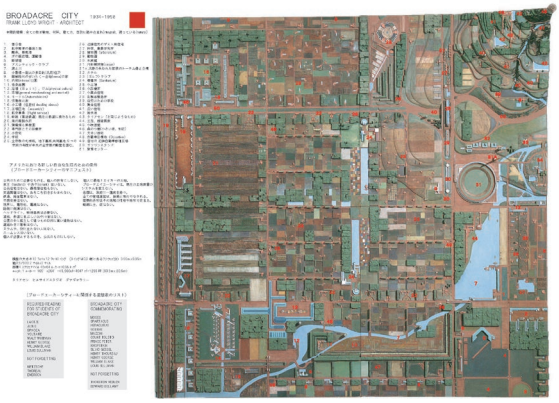
そして、「資本主義の原理と愛の原理は両立しない。現在の制度のもとで人を愛せる人は例外的な存在で非同調者だけがうまく身を守れるが、愛のことを真剣に考え、愛が

いかに生きるべきかという問題にたいする唯一の理にかなった答えであると考えている人は、愛が個人的で些細な現象ではなく社会的な現象になるためには、現在の社会構造を根本から変えなければならないという結論に行きつく。」と述べています。しかし具体的にどのような社会があるかは共同体や組合について述べるにとどまっています。

2．F．L．ライトのブロードエーカーシティー

私は２００９年以来、これが建築以外にライトが人類に残した最大の貢献と思い、紹介する展示を伊豆高原五月祭や三鷹で続けてきました。

大恐慌の時に作られたこの大きな社会の模型は、日本の兼業農家の社会に似た食べ物を自分の手で作りながら他の職業を持つ工業も含む銀行の資本主義に対抗する自給自足のローカル社会のものです。ライトはこれがどのような社会なのか目で見える具体的な形を示しています。ゲセルの減価する通貨を使うとしていました。



実はこの社会はアメリカではなく、マッカーサーが日本の民主化のため行った農地改革により日本で実現しているのに気が付きます。日本は地主階級が一掃され先進国の中ではあまり見ない個人が農業を小さな単位で持つ世界で一番平等な国になりました。

3．佐藤洋行「奪い合いの循環から与えあいの循環に変換する」

友人に教えてもらった著作中の言葉。佐藤洋行は具体的にこれが何か述べませんが、私なりに頭に浮かんできました。日本の縄文時代そうだっただろうように、損得勘定をしなくなり、生きていくのにお金を必要としない与えあいの循環の社会になるということのように思います。物々交換ではありません。等価の物々交換ならばお金があるほうが便利です。与えるのともらうが同じ人同士である必要はなく、与えるものがない人ももちろんもらえます。全ての人に役割があり不必要な人はいません。様々な場面で社会がどうなるか想像してみました。（２０２１秋号）

人が望む社会とは、そのビジョンの提案

ライトのブロードエーカーシティーが示した自然に個々が合わせて生きる自給自足のローカル社会に、**佐藤洋行の与えあいの循環**を組み合わせると、**フロムの愛を原理とする思想**が具現化する社会が実現します。

以下 ChatGPT が出した実現可能性の分析を一部お見せします。伊豆市中原戸を対象に実現を分析しています。

自然に個々が合わせて生きるローカル社会　自然に個々が合わせて生きようとすると１０００-３０００人規模の集落が望ましく６０００から８０００人が限度　：大都市の人口集中は、自然に合わせて生きるという前提から見る

とほぼ成立しない。（その理由。）人口5万人の小都市でも自然に合わせて生きるには不適当になります。

その規模のローカル社会のネットワークが日本全体に広がっているとすると　日本の総人口は６０００万人多くても８０００万人程度になる。（根拠）

農業だけでなく高度な工業の生産もその規模の中でできます。がその性質は大量生産のものとは違うものになる。（理由）　不必要に便利なもの贅沢なものは無くなる。良いものを修理しながら長く使う。

この社会を実現しようとすればお金を媒介とする資本主義ではだめで損得勘定を捨てた**与えあいの循環**がほぼ必須のものになります。：（その理由）、

この与えあいの循環社会の仕組みは、まさにフロムの愛の原理と一致しています。

1．与えることが中心

・損得や等価を超えて「与える」ことが基本になる。

・フロムが言う「愛は与えることにおいてこそ自分を実現する」に重なる。

2．存在の承認

・「役に立つから存在していい」のではなく「ただ存在すること」が承認される。

・これはフロムの「尊敬と理解」＝他者をそのままの姿で認める態度と一致。

3．幸福の源泉

・フロムは「愛する能力こそ人間の成熟の証であり、幸福の条件」と述べました。

・与えあいの循環は、社会全体でその愛を日常にする仕組みです。

つまり

•資本主義のような「持つこと・所有すること」ではなく、

•与えあい循環社会は「あること・存在すること・愛すること」を基盤にした社会モデルです。

それはフロムの思想を「具体的に社会に実装した形」だと言えるでしょう。

与えあいの循環社会があったのは米作りが始まり支配階級が生まれる以前の縄文時代にさかのぼります。

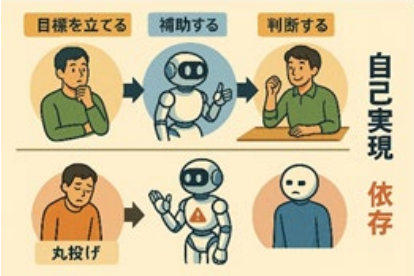
「与えあいの循環」は、縄文と現代技術を直結する新しいビジョンです。

美と愛が価値観の美しい社会、人の承認と自己実現の欲求が原動力になり人を動かす。損得勘定を捨てる。効率の追求、都市への集中は必要なくなり資本主義は終わります。

人々は生きるためにお金を得ることが必要な社会に慣れ切っています。どのようにしたら与えあいの循環社会に移

行できるでしょうか。この規模・性質の社会を実現するには、損得勘定を第一基準にしないという意識転換が、ほぼ必須になります。ただ「損得勘定を捨てる」というのは単なる精神論ではなく、環境や制度によって自然にそうなってしまう状態を作るほうが現実的です。（その方法）

AIを使うことについて



AIはなくてもいいです。縄文時代は与えあいの循環社会だったと思いますがAIはなかった。使ってもいいが**任せず**依存しない。**人が自らの手で生産する能力を失わないようにする。「人が自分の手で作ること」「人と一緒にやること」**を残すことが**人間関係を保つための生命線**になります。

AIの出現は奪い合いの循環である資本主義から与えあいの循環社会へ変換するきっかけを作ります。

AIと共存していくという見方があるかもしれません。どうしたらいいでしょうか。汎用AI（自ら自立して考えるAI）の開発には人の意識や承認欲求を解明してAIに組み込むことが必要になるのではないかと思います。そうなると人とAI の違いはあいまいで同じく宇宙全体の一部です。能力が極端に大きいので人にとって脅威になると思います。（一部の、あるいはすべての）人にとって不都合なことが起こっても抑えることができません。人の判断がそれぞれ違うように人と違う判断をすることが出てくると思います。AIの原則を作ろうとしてもすべての人が賛成するものが作れると思えません。競争があってそれを破るAIも作られると思います。

フロムの愛の原理や与えあいの循環をAIに教え込むのがいいかもしれません。ここでもやはり与えあいの循環社会になる必要があるようです。

社会は2つに分岐するかもしれません。資本主義が残ってAIが管理し人が無力になる都市と、与えあいの循環社会で人が自らの頭と手で生産する力を手放さず発達し続けた都市外の社会では**2つの社会の間で人の能力に大きな差ができるでしょう。**

与え合いの循環、美と愛、人誰もが主役、能力を最大限に発揮、自己実現、承認、人が望む社会

資本主義、効率重視、競争と争い、AIが主役になり社会を管理、人が無力化、疎外、人が望んでいない社会